東日本大震災

復興への取組み

現地を知ることから
復興支援を始めよう

ラグビーワールドカップ2019
フィジー対ウルグアイ

[岩手編] 釜石とラグビーワールドカップ

東京都

❶「鉄と魚とラグビーの街」と震災

岩手県釜石市は「鉄と魚とラグビーの街」と呼ばれる。岩手県南東の沿岸部に位置し、三陸復興国立公園のほぼ中央にある。急峻な山々や海に囲まれた典型的なリアス式海岸で、世界三大漁場の一つに数えられる街だ。

世界遺産の橋野鉄鉱山など近代製鉄発祥の地で、戦後は新日本製鉄株式会社の企業城下町として発展。街は、雇用や企業スポーツなど様々な面で新日本製鉄株式会社と共にあった。1959年創部の新日本製鉄釜石ラグビー部は、昭和の時代に日本選手権7連覇を果たすなど、「北の鉄人」と呼ばれ、街の誇りだった。

しかし、釜石市民と密接な関係にあった新日本製鉄釜石製鉄所は、1960年代から縮小が始まり、1989年に高炉が休止したため、街は自立への道を模索し始めた。新日本製鉄釜石ラグビー部も市民クラブ「釜石シーウェイブス」になった。

そのような中、2011年3月11日に東日本大震災が発生。激しい揺れに続き、大津波が街を襲った。釜石市職員の瀬戸周さんは当時の様子を語る。「建物の外へ避難しようと階段を下りた時、窓ガラスが割れて降ってきた。市役所の外には避難所へ向かう人々がいて、避難誘導して自分も避難所へ向かった。その後、市役所は津波にのまれた。」。

岩手県沿岸広域振興局土木部職員の及川郷一さんは、震災時遠野市におり、釜石に10mの津波が押し寄せたことをラジオで知った。そもそも防潮堤の高さは7m程。「大変なことが起こった。」と驚愕した。結局、釜石湾は10.1m、鵜住居（うのすまい）地区がある大槌湾は15.1m、両石湾は22.6mもの津波に襲われた。

津波が押し寄せた釜石市・鵜住居地区

❷ラグビーワールドカップ招致へ

地震と津波によって、壊滅的な被害を受けた釜石市。根浜海岸にある旅館「宝来館」の女将 岩﨑昭子さんは、津波によって従業員を3名亡くした。震災の衝撃によって喜怒哀楽の感情すらも失われていた時、親交があった釜石シーウェイブスの事務局職員がラグビー関係者と訪れ、皆で岩﨑さんに言った。「女将さん、頑張れ。ラグビーワールドカップも2019年にあるから。釜石はラグビーの街だから、世界中の人が釜石に来るよ。」。「海から入ってきたら緑が広がって、ここの風景はオーストラリアのラグビースタジアムがある街の風景にそっくりだよ。」。

その言葉を聞いたとたん岩﨑さんには、灰色だらけになってしまったガレキの街に、昔の風景が忽然と浮かんできた。「そうだ、ここは緑の美しい私たちの街だ。」。思わず言った。「だったなら、釜石でラグビーワールドカップをやってけれ。」。

こうして思わず口をついた岩﨑さんの言葉から端を発し、釜石の将来を担う子どもたちに夢と希望と勇気を与えようと結束した釜石市民有志がRWC誘致推進会を立ち上げ、ラグビーワールドカップ2019の招致に向けて動き始めた。釜石市も、開催都市として立候補を表明。岩手県と釜石市の共同開催を国が支援する体制を整え、日本国中のラグビーを愛する人々と岩手県民、釜石市民がスクラムを組んだ結果、2015年3月、ラグビーワールドカップ2019大会の開催地の一つに釜石が決まった。

当初は予算の面からも逆風が吹いていたが、日本国内のラグビー気運が高まり、一気に風向きが変わった。岩手県民、釜石市民が大会の開催に向けて、全面的に推進することとなった。

ワールドカップの開催地に決まり歓喜の瞬間

③ラグビーワールドカップ開催に向けて

スタジアム建設地は、津波にのまれた鵜住居小学校と釜石東中学校の跡地に決定したが、人口3万5千人ほどの釜石市にとって、ワールドカップ基準を満たすような大規模な客席を要するスタジアムは必要なかった。そこで、常設の客席は6千席のスタジアムとし、ワールドカップ開催時には1万席の仮設スタンド席を設けることとした。

また、スタジアムの幕屋根は鳥の羽ばたきや船の帆をモチーフとしたデザインとし、客席には地元の森林資源を活用したウッドシートを設置するなど、自然景観と調和したスタジアムとした。

そして、何よりもワールドカップ開催時に津波防護機能が確保されていることが開催条件の一つとされた。しかし、ワールドカップ開催前に津波防護機能を備えた鵜住居川水門の工事を完成させることは困難であったが、工法の工夫などあらゆる手を尽くしてスケジュールの短縮などを図り、何とか津波防護機能を確保した。

完成した釜石鵜住居復興スタジアム

東京都派遣職員が取り組んだ鵜住居川水門・片岸海岸防潮堤工事

現在建設中の鵜住居川水門は、釜石鵜住居復興スタジアムが建つ鵜住居川河口の水門だ。水門の全長は180m。大きさは東京駅丸の内駅舎に匹敵するほどで日本一の規模といっても過言ではない。

この水門や防潮堤工事に東京都派遣職員が取り組んできた。津波から街を守るため、2021年3月の完成を目指している。

完成が待たれる鵜住居川水門

④ 世界中の人とつながったワールドカップ

2018年8月、「釜石鵜住居復興スタジアム」が完成。オープニングイベントで、地元釜石シーウェイブスの記念試合が行われた。試合前には、釜石高校2年生の洞口留伊さんがキックオフ宣言を行い、「わたしは釜石が好きだ」というスピーチは、地元の人のみならず世界の人々を感動させた。スピーチは、釜石とラグビーを愛する気持ち、釜石の復興を応援してくれている日本や世界の人々への感謝を表すものだった。

ラグビーワールドカップ開催前の出来事を釜石市職員の瀬戸さんは語る。「試合が開催された鵜住居地区で悲しい思いをされた方がいました。その方が『ラグビーワールドカップの試合のチケットが当たったんだ』と喜んで私に話してくれた時に、本当に救われたような気持ちになりました。」。

そして、2019年9月25日、釜石市民の夢と希望であったラグビーワールドカップ2019フィジー対ウルグアイ戦がスタジアムで開催。スタジアムの外にも多くの人が集まり声援を送った。

フィジー対ウルグアイ戦

この日は釜石市や岩手県沿岸部の小中学生2千500名が招待された。釜石市内の小中学生によって「ありがとうの手紙 Thank You From KAMAISHI」の合唱曲が歌われ、世界中へ感謝の気持ちを伝えた。

10月13日のナミビア対カナダ戦は台風の影響で中止となったが、カナダ代表選手が大雨で浸水した釜石市内のボランティア活動に参加するなど、長年にわたって歓迎の準備をしてきた釜石市民と釜石を訪れた代表選手との絆も生まれた。

震災で傷ついた釜石は、ワールドカップによって、市外や県外、世界中の人たちとのつながりが生まれた。これからも、新たに生まれたつながりを大切に復興の道を歩き続けていく。

コラム

釜石市民とラグビー

釜石市民とラグビーは切っても切れないつながりがある。戦後被災した街を元気づけ、街をまとめていたのは富士製鉄株式会社の企業野球チームだったが、富士製鉄合併後は新日本製鉄釜石がその役割を担ってきた。

戦後の釜石市民にとって、釜石＝鉄であり、ラグビーであった。新日鉄釜石の躍進、日本選手権7連覇は街の人々の誇りで、少年少女の憧れだった。少年たちの家には選手のサインが入ったラグビーグッズが飾られ、少女たちは選手と触れ合える機会を見つけるためにダンスを習った。

東日本大震災によって、釜石は壊滅的な被害を受けたが、街の人々には不屈のラグビー魂があった。自治体職員、街の人々がそれぞれに出来る役割を果たし、釜石の未来を担う子供たちに夢と希望を持ってもらおうと、OneTeam（ワンチーム）となってラグビーワールドカップを釜石に招致し、試合当日を成功へと導いた。

ワールドカップ招致に向けて尽力した宝来館女将の岩崎昭子さんはラグビーワールドカップを終えて語った。「ラグビーワールドカップの試合があった9月25日は、想像以上に素晴らしくて、こんなことが本当に出来るんだなと感動しました。釜石の未来の幕開けだと思わせてくれる素晴らしいものでした。」

「宝来館」女将の岩崎昭子さん

震災で被災し、世界中から応援を受けながらラグビーワールドカップを終えた釜石は、日本のみならず世界中の人々とつながっている。「Thank You From KAMAISHI」。釜石鵜住居復興スタジアムでは、市内の小中学生によるモザイクアートで世界中に「ありがとう」を届けた。釜石の未来を担う子どもたちから、世界に感謝を伝える取組みは今も継続して行われている。

釜石鵜住居復興スタジアムの
モザイクアート

震災復興事業で育まれた絆

震災復興のため派遣された県外職員。岩手県職員などと苦労を分かち合いながら、現地には確かな絆が育まれていた。

奥平周示さんは、東京都から派遣されて岩手県沿岸広域振興局土木部で働いている。担当しているのは、鵜住居川水門と片岸海岸防潮堤工事だ。東京都内や災害派遣地での土木工事経験を活かし、釜石市の災害復旧工事ではリーダーの一人として、岩手県内外職員の混成チームを引っ張る。出身地は違えども、被災地復興のために役に立ちたいという職員共通の思いのもと、OneTeam（ワンチーム）で、災害復旧工事に取り組んできた。

奥平さんの上司である岩手県職員の及川郷一さんも、県外職員の枠に捉われず奥平さんに全幅の信頼を寄せる。奥平さんはリーダーとして、時に工程管理のみならず建設地区の住民からの意見にも真摯に対応してきた。

静岡県派遣職員の杉山学之さんも、奥平さんと共に鵜住居川水門と片岸海岸防潮堤工事に従事した。現地に不慣れな杉山さんのため、上司の及川さんは岩手県沿岸部全体の状況が分かるように、釜石以外の工事現場も視察できるように取り計らった。ワールドカップを控え工事の忙しい中で、杉山さんは岩手県職員と県外職員のワンチームで「いわて銀河100kmマラソン」に参加し、チームで完走したことは良い思い出だ。ラグビーワールドカップの試合には、奥平さんや杉山さんたちが工事を担当した防潮堤の上に住民が座り込んで声援を送った。

2019年10月、釜石市片岸海岸の防潮堤工事が完成し、市内全ての防潮堤工事が完了した。岩手県沿岸広域振興局は、これまで工事に従事した延べ約160名の派遣職員に感謝を表すため「感謝の会」を開催。地元に戻った元派遣職員が釜石に集まり、「ありがとう」と書かれた記念プレートが、4つの海岸防潮堤に埋め込まれた。

感謝の気持ちを表す記念プレート
前列右端が奥平周示さん

釜石よいさ

踊り継ぎたい夏がある

2019年に31回目の開催を迎えた「釜石よいさ」は、1987年の夏から始まった。100年間火を絶やさなかった製鉄所の高炉が休止となり、先行きの不安だった釜石の街に元気を取り戻そうと当時の若者が立ち上がった。「1万人の虎祭り」をキャッチフレーズとして、2010年まで24回開催してきた釜石の夏の風物詩だった。東日本大震災のためにやむなく2年間は開催が叶わなかったが、2013年に復活。2019年に、再開後7年目の開催を迎えた。

8月の第1土曜日夕刻、市内の目抜き通りが祭り会場となる。「サーッサ、ヨイヤッサ」という威勢の良い掛け声とともに、虎に扮装して跳んだりはねたりするエネルギッシュな踊りは「虎舞」だ。一方、優雅に踊る「よいさ小町」にも魅力がある。2019年はこども園の子どもたちも含めて30団体、約1千400人が群舞に参加し、見学客を合わせると1万人以上の市民が集った。

お囃子も踊りも覚えやすく、観光客でも飛び入り参加できるのが魅力の一つ。是非一度、釜石の夏を肌で感じてみてはいかがだろうか。

開催日
毎年8月第1土曜日

会場
岩手県釜石市大町～只越町　特設会場

主催
釜石よいさ実行委員会

お問合せ
☎080-3149-4013

東日本大震災 復興への取組み 令和2(2020)年2月発行

印刷物規格表第1類
登録番号(31)第24号

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

VEGETABLE OIL INK

編集・発行：東京都総務局復興支援対策部
東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話　03-5388-2368(ダイヤルイン)

編集・印刷：
シーアンドゼットコミュニケーション株式会社